新・農業経営者ルポ／第 205 回

“成田の石油王”が挑む 進化し続ける水田経営



“成田の石油王”が挑む進化し続ける水田経営

水が湧くほど条件が整わない湿田で奮闘する小泉輝夫は、どれだけの仲間を励まし、鼓舞してきただろうか。ときには思い悩み、ときには弱音を吐く。それでも作業はやめないし、妥協しないし、情報収集も怠らない。その実践に裏付けられた技術談義には説得力があり、農家仲間も行政も研究者もメーカーも唸る。就農当時から目指してきた経営ビジョンを貫いてきた「成田の石油王」の想いとは――。

文／加藤祐子　写真／江藤はんな・小泉ファーム・加藤祐子



暗渠から潤沢に排水される“石油”（＝水）





泥炭のキツイ圃場ではトラクターや田植機がハマることも、しばしばある



湿田は乾田化するために、冬場にプラウをかけ、寒ざらしを行なう

穫れる圃場への第一歩は圃場を乾かすこと

「秋の収穫後、早めにスタブルカルチをかけて乾かし、プラウをかけると、冬場に霜が立った後に太陽に当たることで、土はフカフカになる。寒ざらしといって、土が乾くと窒素成分も出てくるんだ」

電話越しに2時間余り、怒涛のレクチャーが返ってきた。土づくり作業機の特集を担当した約9年前のことである。耕すことへの熱意、あるいは土に向き合う真剣な姿勢に圧倒されながらも、素人なりにワクワクした。作業の一つ一つに、考え尽くされたノウハウが詰まっていることが伝わってきたからだ。この電話取材こそが、小泉輝夫との出会いだった。

小泉ファームのメインの作物はコメ、大豆と子実用トウモロコシを合わせて、現在の耕作面積は約52haに及ぶ。拠点は、成田国際空港から約10km北側の千葉県成田市久住地区にある。利根川水系の尾羽根川と根木名川の流域で、台地を川が浸食してできた谷津が多いエリアだ。夏には蛍が舞い、いまでも多様な生態系が残っている。しかし、耕作条件はお世辞にも良いとは言えない。水に恵まれている反面、海抜は10m以下、地下水位が高く、排水性は著しく悪い。狭小区画の湿田ばかりで、付帯道路も当然ながら狭い。規模拡大や作業効率化は苦労を強いられる条件のオンパレードだ。

「作物の穫れる圃場への第一歩は、排水性を改善すること。肥培管理に力を入れても、排水性が悪く、根の成長が阻害されれば、その努力は報われないでしょう」

小泉の話す乾田化とは、暗渠を入れて田んぼの水を思いっ切り抜



小泉ファーム
代表
小泉 輝夫　千葉県成田市

1974年生まれ。高校卒業後、専門学校に進学し、実家の農業に就く。経営移譲して18年が経つ。水稲単作経営の多い谷津田、狭小な田んぼが広がる湿田エリアで、冬季のプラウ耕により土を乾かして乾田化を実践。畑作作業体系を導入し、乾田直播、転作大豆、さらには子実トウモロコシの栽培などに挑戦してきた。100馬力超えの大型トラクターや畑作作業機を導入し作業効率を高め、常にその瞬間の最適を求める姿勢を貫いている。経営面積（2021年度）は、水稲36ha、大豆8ha、トウモロコシ8haの計52ha。

くことを指す。水保ちが良くないと良質米は穫れない。減水深を適度に保つために、乾かす圃場は乾かし、乾き過ぎる圃場ではどう水を与えるかを考えるという。

例年、冬季は春作業が始まるギリギリまで自前で暗渠を施工する。傾斜をレーザーで正確に測って溝を掘り、もみ殻とコルゲート管を埋設する。若い頃に業者から盗み取った技術は年々磨きがかかり、いまではプロフェッショナルの域に達する腕前だ。掘削ドリルを溶接した溝掘機に、もみ殻のフレコンを吊るすクレーンを組み付け、コルゲート管のコイルを抱えながら埋設するオリジナル機を開発し、改良を重ねてきた。これまで培ってきた手腕が評価され、請け負う事業は数年先まで決まっている。


暗渠施工のために技術の粋を極めて
開発してきたオリジナル機

暗渠を施工した圃場は、できる限りプラウで下層土を掘り起こして、乾かす。太平洋側の低温で乾燥する冬の気候はこの作業に持って来いだ。湛水後に土壌から供給される窒素が増加する乾土効果も期待できる。

畦畔を取り、隣接する圃場を合筆する際にもプラウを使う。プラウ跡の山はレベラーで均すが、田面をほんの少しだけ斜めに仕上げる。全面、同じ勾配に仕上げてはダメらしい。小泉の頭の中には3次元の施工イメージが描かれていて、水稲の流し込み肥料をまんべんなく行き渡らせるのも、畑作物を作付けした場合に周囲の明渠に降雨後なるべく滞水しないように排水を促すのも、この勾配の仕上がり次第というのだ。この手の技術談義は奥が深く、話し始めたら止まらなくなる。

暗渠は、乾きすぎる圃場にも有効である。パイプラインにつなげば、地下灌漑設備と同様に、圃場への水の出し入れをコントロール可能にする。夏場に地下から水稲の根に冷たい水を与えられないだろうか。暗渠の使い道をさらに試行錯誤している。

驚かされたのは、大型トラクターが入れるように谷津田周りの農道の拡張工事を自前で手がけてきたことだ。なぜそこまでやるのか。行政が動くまで待つのではなく、自分でやれることは何でもやる。話を聞く限り、寡黙に淡々と行動する後ろ姿を見せてきたのは、父・孝義だ。小泉は就農した時点で、コメに特化しているだけでは水田農家は生き残れないと危機感を抱き、畑作物を作付けできる汎用的な圃場づくりを意識し、乾田化に取り組んできたのである。

親子二人三脚からワンオペ、そして雇用のある経営に

小泉は幼少期から祖父、父の農業に触れて育った。野球に没頭した高校時代を経て、専門学校では自動車整備技術を習得。卒業後は東京で自動車関連の職に就いた。その後、25歳で就農し、その2年後に父から経営を移譲された。

一時期は父と弟と3人体制だった。しかし、作業の段取り、機械の使い方、仕上がり、いずれも小泉が求める水準は厳しい。妥協できない性格も相まって、兄弟がぶつかる場面が増え、弟は別の仕事に就いた。振り返れば、人づきあいに器用な弟のほうが社会生活には向いていると苦笑いする。


小泉の挑戦を温かく見守り、
応援してきた父・孝義（写真右）

その後、二人三脚で営農してきた父が病に倒れた。経営移譲後も、小泉の決断を常に見守ってきた父の離脱は堪えた。繁忙期には弟が手伝いに帰ってきてくれたものの、ワンオペ作業で奮闘する日々が始まった。トラクターの大型化、作業幅の広い土耕作業機の導入が加速した。来客もなく電話の鳴らない夜間の作業も常態化した。LEDライトをトラクターに装着したり、サスペンションシートに換えたり、長時間快適に作業できる装備にも気を遣うようになった。

だが、耕作面積が50haを超えると、明らかに手が足りなくなった。子育てが落ち着いた妻に協力を仰

“成田の石油王”が挑む進化し続ける水田経営

いだり、大型農機の操作に慣れている仲間にオペレーターを頼んだりして、数年間は凌いだ。ようやく昨年、今後の経営を見据えて、雇用する経営へと転向した。作業を教える時間がかかるが、2年目になって、任せる部分も少しずつ増えてきたという。

「湿田なら湿田なりに、穫れる圃場をつくるだけ。やるべきことをやっていたら、及第点はとれる」

小泉はこう言い切る。常に目標から逆算して作業を組み立てているからだ。水稲の目標はさまざまな条件の圃場があるなかで、平均反収9俵（540kg／10a）を確保すること。仕上がっている圃場では穫れても、深く起こせない圃場では攻められない。目標を下回らないように、この時期にどの作業を済ませておきたいのか。毎年何らかのトラブルに遭遇するなかで、基本の「キ」を押さえる大切さに気づかされたのだ。

実際には、雨が続いて圃場に入れなかったり、従業員が急に来られなくなったり、急な来客が入ったり、なかなか思うように作業は進まない。2019年には台風15号の直撃を受けて、作物だけでなく、農業機械を格納していた育苗用ハウスが全壊した。実は、ハウスの倒壊は10年間で3回目だった。災害復旧の前提となる原状復帰を諦めて、床にコンクリートを打ち、頑丈な鉄骨ハウスを建てた。広いだけでなく、光を遮蔽したため夏場でも中は涼しく、快適に使えている。

もちろん、頭の中には「いまやりたいこと」と「将来的にやってみたいこと」が溢れている。今年は大豆の播種が順調に進んだ。そこで、乗用管理機による追肥作業と並行して、ドローン専用の尿素肥料の散布を試した。実演機や資材を手配しても、今年は使えないかもしれない。それでも、天候と時間の許す限りチャンスを狙わずにはいられない。その探求心は年々、研ぎ澄まされている。



19年の台風15号の被害を受けて、格納庫を建てた。トラクターやコンバインなどの農機具、肥料等の資材、収穫物が十分入る広さを確保した





20年に再建した育苗用ハウスでは、大豆の天日乾燥を試験中。うまくいけば、トウモロコシの乾燥調製にもこの方法を採用する見込みだ

「成田の石油王」には同志の親愛が溢れている

冒頭の電話取材をした時期には、地域の信頼を得て徐々に農地が集まり、経営面積が30haを超え、作業体系がある程度確立してきた頃だった。30代半ばの小泉は、全国にいる〝誰もやっていないこと〟に挑戦する水田農家との交流を求めて、本誌読者の集まりや、土を考える会の研修会に積極的に参加するようになった。

農業機械をこよなく愛する水田農家には熱意がダイレクトに伝わり、小泉の元を訪ねて交流をする仲間も増えた。なかには暗渠施工の時期を狙って、その技を学びに出向いた者もいた。いつしか小泉に、湿田から潤沢に水が湧き出る様を石油の採掘になぞらえた、「成田の石油王」の異名が付いた。仲間の多くは湿田で自ら苦労しているため、同志ならではの尊敬の意を込めて呼んでいるのだ。

暗渠施工は「油田開発」と呼び、田植機やトラクターが田んぼにハマれば「ブラジル行き」だ。地下を潜って地球の反対側にたどり着くという意味で使われているが、いずれも苦労を笑いに変えたユーモアである。

一方で、仲間が増え、交流の輪が広がるほど、小泉のもどかしさは増している。約20年近くかけて、



田植機やトラクターがハマる軟弱な場所。吸い込まれたら、その先はブラジルか?!

畦畔をとり、複数の圃場を合筆してきた結果、登記上５００筆近くある圃場は、今年大豆を播き始めた時点で１８２筆になった。この数字こそがこれまでの苦労を物語っている。単純に１圃場当たりの平均面積を計算すると、30ａに満たない。１haを超える圃場もあるが、いまだに作業効率の悪い狭小区画を多く抱えている。

水田農業は、規模拡大や作業の効率化が経営を左右する。周りの農家がやりたがらない苦労を長年続けてきたのだから、自覚はあった。北海道から九州まで数多いる農家の誰よりも、営農環境が恵まれていないという現実には、正直参ったと苦笑いを浮かべる。

湿田でも乾田化すればトウモロコシが穫れる！

「今年は攻めまくるよ。どっちに転ぶか、いや転べるかどうか」

小泉は今年、飼料用米をやめて、思い切って８haにトウモロコシを播いた。昨年までの試験栽培から、事業化に踏み切る勝負に出たのだ。理由は２つある。昨年、早期播種の作型に手応えを感じたことと、県内あるいは関東周辺の牧場や養鶏家から国産トウモロコシのニーズが寄せられたことである。

そもそも、湿田で子実トウモロコシの栽培に挑戦したのは、誰もやっていなかったからだ。北海道で取り組みを始めた柳原孝二さん、岩手・花巻で挑戦した盛川周祐さん、秋田・大潟村で挑戦した宮川正和さんに刺激を受けて、14年に初めてトウモロコシの種を播いた。水稲の春作業が落ち着いた６月のことだった。大豆以外の畑作物は未知の領域だったが、排水性改善に真剣に取り組んできたからこそ、湿害に弱いトウモロコシ栽培を試してみたい意欲に駆られた部分もあっただろうと思う。

その後、17年にかけて３haまで広げた。だが、18年はアワノメイガの被害を受けて生育不良になり、19年は台風の直撃で全面倒伏。それでも諦めずに種を播き続けた。そして昨年、台風被害からの復旧工事の影響で春先の水稲作業が遅れ、３月中に播種を試みることになった。９月より前に収穫できれば、台風によるリスクを大幅に軽減できる。ようやく７年目にして早期播種・早期収穫の作型に手応えを感じるに至った。

子実トウモロコシは、現状では需要先を自ら確保しなければならない。初年度は育つかどうかが命題だった。収穫してから需要先を探すことになったが、その段階で出会ったのが、酪農家の上野裕さんと養豚家の塚原昇さんである。翌年から早速、取引が始まった。当面は量ではなく、共に取り組みを重ね、認知を広げることに賛同してもらった。ときには水田農業の常識が通じない場面もあるが、粘り強くコミュニケーションを重ね、信頼関係を深めた。

折しもトウモロコシの国際取引価格は７年振りに高値を付けている。ほぼ輸入に頼っているトウモロコシの代替ではなく、国産かつＮＯＮ－ＧＭＯのトウモロコシという価値を共有する需要家との出会いが後押しになっている。

７月初旬時点で、トウモロコシの生育は順調だ。５枚の湿田を合筆した圃場にトウモロコシが植わっている景色は圧巻である。梅雨のまとまった降雨も額縁状に明渠を掘り、表面排水する圃場づくりで乗り切った。８月後半に収穫予定でコンバインを手配している。

投下熱量の合う人とともに

コロナ禍は社会全般に価値観の転換を強いたが、小泉の脳ミソにも変革をもたらした。数年前から主食用米から加工用の餅品種に力を入れていたが、コメ業界は在庫余りと米価下落に直面した。

その一方で、会議や研修の機会が減り、家族と過ごす時間が増えたことで、生活者の視点がこれまで以上に芽生えたようだ。外出自粛中も、生協の宅配は国産の安全・安心を謳う食材を届けてくれたことへの感謝を口にする。しかし、生産者としてコメで差別化を図り、物語を紡ぐのは容易ではないこともわかっている。コメは生産量も関係者も多すぎて、普遍的になりすぎている。それなら、トウモロコシをつくることで、飼料供給という畜産業の物語の起点に関われないだろうか。この地で収穫したものを、近隣のエリアに供給して、堆肥を還元するという循環を全うしたいという欲求が湧き上がってきたという。

早速、行動に移した。トウモロコシの供給先である（農）新利根協働農学塾農場に堆肥の供給を依頼したのだ。成田近郊には畜産農家がないため、長らく畜産堆肥を確保できず、鶏糞を購入したり、緑肥を作付けしたり、代替手段を講じてきた。だが、吸肥性の高い

“成田の石油王”が挑む進化し続ける水田経営



高低差のある圃場を合筆し、子実用トウモロコシと大豆を作付けした。湿田にも関わらず、子実トウモロコシの成長する様子は圧巻である



子実トウモロコシの収穫風景。早期播種・早期収穫の命運はいかに？



堆肥を運搬するために、小泉自ら何十往復もトラックを走らせた



20年産水稲は長雨の影響を最小限に抑え、品質が良く、収量も良かった



子どもたちも草取りや春作業を積極的に手伝ってくれる

トウモロコシほど堆肥と相性の良い作物はない。こうして、21年産のトウモロコシから物質循環という新たな物語を紡ぎ始めている。

米麦などの土地利用型農業では、一般的に10a当たり10万円以上の収入が収益性の判断基準になる。トウモロコシ栽培に挑戦し始めた頃から投下労働時間当たりの収益という発想に理解をしめしてきたが、コロナ禍を経て、その呪縛から解放されたという。

「やれるかどうかは、投下労働時間と自分に対するコストが見合うかどうか。合わなければ、拡大しても意味がないからね。だけど、トウモロコシは時代のニーズにマッチするのではないだろうか。少なくとも、投下熱量の合う人とならやっていけると思う」

とはいえ、現段階で子実トウモロコシは儲かる作物にはなっていない。だが、経営のリスクヘッジになるだけでなく、水田農業では知りえなかった情報やネットワークにアクセスできるようになり、視野は確実に広がった。

近年は天候リスクが高まり、毎年、水田農家は我慢と選択を強いられている。6～10月は長雨や日照不足、台風、大雨が避けて通れない。天候が安定する冬の圃場づくりに時間をかけて、水稲でも、乾田直播、湛水直播、移植体系を組み合わせたり、大豆やトウモロコシを作付けしたり、同じ工程でも複数の作業を想定している。これまでは、技術やコストや労力を総動員して、最大の収穫を得る方法を極めていた。今年はそこから技術を厳選する、いわば「引き算」による最適化を図っている。

小泉には高校生の長男を筆頭に3人の子どもがいる。最近、長女の中学校からの宿題で書いた作文に、熱い思いを綴った。

「自分がやりたいことがあって、それを達成しようと思わなければ、お金を生み出さないし、社会に貢献できない。そこを目指すことが重要だよ。勉強だけできたらいいということではない」

いつか彼らに「凄いことやってるじゃん」と言われたい。そのために頑張っていると語る小泉には父の顔が覗く。まっとうな生き方を貫くためにはビジネス哲学や経営ノウハウも必要だが、それ以上に投下熱量の合う人の応援が欠かせない。若い頃から継続してきた小泉流のフレキシブルな経営は、進化を続けている。（敬称略）